

十三

向田の火祭り



「能登島の向田。高さ30メートル、重さ10トンものたいまつが夏の夜空をこうこうと赤く染めます。豊作の祈りがたいまつに届く頃、大きくうねって炎が地上に倒れ、歓声が祭りをいっそう盛り上げます。」

かいせつ

毎年7月31日に行なわれる能登島町向田の伊夜比咩神社の火祭りは、夏の薄暮が迫るころ、神社境内に待機していた7基の奉灯に火が灯され、それを合図に鉦、太鼓、囃子の音が賑かに湧きあがり、男衆は拝殿から出た神輿や奉燈を担ぎ500mほど離れた広場まで練り歩きます。そこには、前日から立てられた高さ30mもの大松明が待ちっており、そのまわりを数百本の松明を打ち振りながら駆け回り、火の粉、火の輪が夜空を明るく照らします。やがて「かかれ」の声を合図に、いっせいに大松明めがけて松明を投げつけると、大松明は巨大な火柱となり、炎を天に突き上げます。夜空も焦がすような壮観な眺めと、男衆の興奮した声で祭りはクライマックスを迎えます。火の粉が散乱し、大松明が音をたてて倒れると、その方角で豊作、豊漁が占われます。

